

選考委員長からの講評

<2023 年度研究助成選考に当たって>

今回も、一般 19 件、若手 10 件の応募をいただき、厚く御礼申し上げます。そこには、現在日本の「安心安全の課題」が、ほぼ網羅されています。パンデミックの影響もさることながら、広い意味でのダイバーシティの視点、具体的には、性被害・性加害や外国人非行、ヘイトクライム問題が目立ったように思います。それ以外では、従来から一貫して着目されてきた少年非行問題、児童虐待問題の応募もかなり見られました。すべて、的確な問題意識に基づく、時宜に適ったご研究対象だったと評価しました。応募された書類を精査させていただきましたが、研究方法も、ほとんどが、現在の学術レベルの水準を超えたものでありました。

しかし、財団の財政状況等により、助成の枠は、一昨年、昨年と同様、抑えめにせざるを得ませんでした。研究目的、研究手法、得られる成果の期待度などが高く評価されたもの全てに助成できたわけではありません。選考委員会一同、誠に残念だと考え、次回以降の、予算枠の拡大を御願ひしていきたくと思います。そして、今回も、最終的に選考された研究に比較しても、研究レベルとしては同等のものが、含まれておりましたことを、申し添えます。

本助成制度の当初のねらいには、若手研究者の育成により、安心安全研究の裾野を広げるという意図もあったのですが、昨年、採択になったのは 2 件でした。今年は、若手のアプライの質と量は上がったのですが、結果的に、今年も採択は 2 件に止まりました。選考委員会としては、厳しい総枠の中で、一般研究の助成を削って、若手に回すことも考えたのですが、倍の応募が有り、研究レベル・成果の現場還元の見点も考量しますと、一般枠も 2 件助成するという結論にいたりました。

まさに、社会の構造、それに伴う安心安全の課題はどんどん変化しており、その速度はますます上がると思われれます。新たな課題に対応した解決策に繋がる研究に助成することの必要性は高まりますが、それ以上に、新しい視点・方法から課題を見出し、対応策を構築していく「人材」の育成も肝要です。その意味では、今回の応募に、サイバーに関する領域や AI を用いた安心安全研究が少なかったことは、残念に思いました。次回の助成に際しましては、領域と手法の、一層の拡大を期待しております。積極的な応募を期待いたします。

選考委員長 前田雅英